

徹底的行動主義と行動分析学に基づく「八正道」の再構築

一人間社会における「その人」の「その行動」の「正しさ」を吟味する—

Noble Eightfold Path based on radical behaviorism for advancing

○渡辺 修宏¹・小幡 知史²

Watanabe Nobuhiro, Obata Satoshi

国際医療福祉大学¹, 障害児通所支援事業所樹の子クラブ²

International University of Health and Welfare, KINOKO Club

Key words: Noble Eightfold Path, radical behaviorism, behavior analysis, rightness

目的と方法

仏教の要諦の1つである八正道は、「涅槃（悟り）」に至ることを目指す実践行（いわゆる修行）を指し、正見、正思（正思维）、正語、正業、正命、正精進、正念、正定によって構成される。この実践行は、仏教に帰依する者のためだけの営みではなく、時に仏教が宗教ではなく実践哲学や科学と呼ばれるように、仏教との縁が決して十分ではない者、つまり万人に対して、十分に有意義な知識や技術となり得る。すなわち、多くの人々の人生の歩み方への八正道の活用が期待される。しかし一方で、仏教に慣れ親しむ者でないと八正道の理解と実践は難しく、その抽象さによって混乱を招くことが少なくない。渡辺・森山（2015・2016）、渡辺・小幡（2021）は、徹底的行動主義（以下、RB）を哲学的基盤とする行動分析学（以下、BA）の理論に基づいて仏教の教えを行動的に、あるいは物理学的事象（環境変化）として捉えた。そして渡辺・小幡（2020）は、八正道を、具体的な日常生活における行動レベルで捉えることを試み、その結果、「特定の場面状況/文脈において『正しい』とされる行動を選択すること・選択し続けること」として整理した。では、それらの行動が選択される根拠となる「正しさ」とは何であろうか。本研究は、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定行動（以下、八正道行動）における「正しさ」をBA的に検討する。すなわち、八正道行動の選択基準となる「正しさ」を検討するため、RBを哲学的基盤とするBAの理論を活用する。

結果と考察

RBおよびBAは、形而上学的概念を用いず、具体的な行動の生起/形成/低減/消滅を追求しながらその原理を明らかにするために、生体の反応（行動）と環境の相互作用に注目する。すなわち、具体的な行動の直前の環境と、その行動そのもの、そして、その行動が生起した直後の環境変化の3つの事象を時系列かつ一体的に捉え、行動の予測と制御（影響）を試みる。したがって、その予測と制御を支える関数関係（科学的根拠）が、RBとBAにおける「正しさ」の選択基準といえよう。

この考え方に基づいて八正道における「正しさ」を検討するならば、その「正しさ」を評価するのが①行動主体者「その人」なのか、あるいは②「その人」を取り巻くコミュニティ（近隣関係、地域、社会、国、文化圏、人類社会）なのか、それとも③両者ともなのかという3つの軸と、それらを④どのように評価する（される）のかについて言及しなければならない。また、a) 評価対象となる行動の機能を即時的結果でみるのか、b) 中・長期的結果でみるのか、あるいはc) 両者ともという、やはり3つの軸と、さらに、I&II) それらの機能が働く範囲（物理的または空間的範囲）についての言及も不可避であろう。すなわち、評価者、評価方法、行動機能の時間的範囲と空間的

範囲の要素が整理されて、初めて、「正しさ」を規定することができよう。

また、それらの要素を整理するに際しては、「その人」という個体発生と、「その人」が属する系統発生（つまり人間という種）、そして、その人間が生き永らえる環境の保全維持の可能性（いわゆるSustainability）をも考慮する必要がある。なぜならば進化論が述べているように、生体の行動（反応含む）はすべて、少なくとも前者2つ（「その人」とその種の存続可能性の向上）に対応して選択されてきているからである。そして、Sustainableな環境設定に対応する行動が「正しい」とされなければ、遅かれ早かれ、先の2つが脅かされるからである。これは、広範な意味での「行動機能の時間的範囲と空間的範囲」の問題に含まれるかもしれない。例えば、「その人」の些細な環境破壊行動（例：缶のポイ捨て、ゴミの分別を怠ること等）が、巡り巡って地球の環境をも損なわせ、最終的に、この星に人間が生存できなくなる可能性を高めるという機能をもつと仮定できる。Gretaさんら、地球環境保全活動家らは皆、そう信じているだろう。

このような考察に基づく、「その人」（個体）が捉える時空間的範囲の限界についても触れなければならないだろう。100年前後の寿命しかない人間にとって、系統発生にかかわる存続可能性を議論するのは決して容易ではない。それ故に、地球温暖化問題はなかなか解決する道筋がみえない。しかし、「その人」が居る環境の（当面の）持続可能性を保持するために、ある程度、短・中・長期的視点に基づいて分析することは可能であろうし、「その人（やその人の家族友人等）」の子孫のために、より望ましい環境の継承を検討することは十分に現実的な課題である。

端的に述べるのならば、八正道行動とは、「その人」とその種の存続可能性をより高める行動、あるいは低めない行動、またはその両者と規定できる。そして、RBとBAに基づいて「その人」の八正道行動を明らかにするためには、上で述べた行動が「その人」の生活場面においてどのくらいのレパートリーとしてあるのか、さらにそれらの行動がどの程度生起しているのか（頻度、生起率）、潜時、持続時間、強度はどうなのか、また、それらの行動がもたらす機能（効果の程度、効果の範囲）について検討または検証していく必要がある。当然、評価する者および軸についての、上で述べたような多元的検討も欠かせない。しかし、「その人」のその種の存続可能性向上を「正しさ」の根拠とするには、性急かもしれない。そもそも、特定の種のみならず、むしろどのような種もやがては絶滅すると考える方が有力かもしれないし、地球にも寿命があるので環境変化によって種の存続が危ぶまれるからである。全ての事象の永続性を認めないのもまた仏教の教えであり（諸行無常）、そうであれば、八正道の「正しさ」は、I&II) 時間的・空間的範囲によって変わらざるを得ないであろう。